

徳一野苦

TOMANO, Ittoku



勉強するのは
何のため?

僕らの「答え」のつくり方

はじめに

「なんで勉強なんかしなきゃいけないの？」

本書はこの問いに答えるものです。

この問いは、だれでも一度は考えたことがあるけれど、でもまた同時に、多くの人が途中で考えるのをやめてしまった問いなんじゃないかと思えます。

だって考えても答えなんか出ないし、結局なんだかんだいって、「しなきゃいけないものは、しなきゃいけない」ということになってしまってるんだから……。

もしかしたら、「学校の勉強なんて意味がない！」と、いさぎよく勉強をやめてしまったという読者も、中にはいるかもしれません。

でも、もし納得できる答えが手に入るのなら、聞いてみたい。

そう思いはしないでしょうか？

「なんで勉強なんかしなきゃいけないの？」

——あえていいたいと思います。この問いに、「**答え**」はあると。

もちろんこの問いは、わたしたちがふだん学校で勉強しているような問題とは、ずいぶんとタイプが違ったものです。だから「**答え**」のタイプも、やっぱりずいぶん違ってきます。

「鎌倉幕府をつくったのはだれか」とか、「水素の元素記号は何か」とか、「2の平方根は何か」とかいったような、学校で習う問題には、とりあえず決まった「**正解**」があります。

でも、「なんで勉強なんかしなきゃいけないの？」という問いに、絶対的な「**正**

解」はたぶんない。

「いい大学に入るため」とか、「いい会社に入るため」とか、「忍耐力をつけるため」「記憶力を磨くため」「論理的思考力をはぐくむため」とか、いろいろ答えは返ってくるだろうけれど、どれが「正解」というわけじゃない。どれもある程度正しいように思うけど、また同時に、どれもちょっと違う気もしてしまう。

だからこの問いは、「正解」というより「納得解」を求めるような問題なのです。絶対に正しい答えというより、「なあるほど、たしかにこう考えればすっきりするな」という、「納得」を求めるような問題なのです。

実はこうした「正解」のない、でもなんらかの「答え」がほしい問題の数々を、とにかくひたすら考えつづけてきた人たちがいます。

「哲学者」と呼ばれる人たちです。

哲学者と聞くと、実生活に役に立たないわけのわからないことを、ぐちゃぐちゃだらだらとむずかしい言葉で考えつづけているヘンな人たち、というイメージが一般に

はあることと思います。

実際、たとえば古代ギリシャの哲学者ソクラテス（紀元前四六九頃〜紀元前三九九）は、「恋って何だろう?」「正義って何だろう?」なんていう、たしかに一見あんまり実生活には役に立ちそうもない問いを、だれかれかまわず投げかけてはひんしゆくを買っていたような人でした。議論の相手はいつもいいいます。「もういいよソクラテス、そんなめんどくさい話は終わりにしよう」。

こんなわけで、哲学者というのは、役に立たないことばかり考えている、どこか風変わりな人というイメージが一般にはあることと思います。

でもそれは、半分あたっていているけど半分違う。あたっていているのは、「風変わりな人」が多いということ、間違っているのは、「役に立たないことばかり考えている」ということです。

哲学は、実生活に役に立たないことを考えるものではありません。むしろ哲学こそが、「正解」のないさまざまな問いに、「納得解」を与えてきたものなのです。

たしかに哲学者には風変わりな人が多いですが、でもそれは、普通だったら途中で

考えるのをやめてしまおうようなむずかしい問題を、とにかくひたすら考え抜くような、ちよつと変わった趣味(?)の持ち主であるからです。

でもだからこそ、彼らが考え抜いてきたことはわたしたちの「役に立つ」。普通だったら考えがおよばないようなところまで、ちゃんと考え抜いてくれているからです。

というわけで、本書では、「なんで勉強なんかしなきゃいけないの?」という問いに、彼ら哲学者たちが(二五〇〇年もの長きにわたって!)積み上げてきた思考のエッセンスをぞんぶんに駆使して、答えていくことにしたいと思います。

それはけっして、身構えるようなむずかしいことではありません。哲学が積み上げてきた「考え方」は、実はとてもシンプルなものなのです。

シンプルなのは当然です。哲学は「納得解」を出すものなんだから、あまりにややこしかったら、だれも「納得」なんてしないだろうからです。

さあ、それでは哲学が積み上げてきた「知恵」を一步ずつインストールしていきながら、教育をめぐる冒険を始めましょう！

はじめに 002

第1章

「一般化のワナ」と「問い方のマジック」

013

1 落とし穴その1！一般化のワナ 015

- 「経験」は人それぞれ／○学校の先生と塾の先生、どっちがいい？
- 先生だってひっかかる／○少年少女は凶悪化した？／○みんなが納得できるだろうか？

2 落とし穴その2：問い方のマジック 027

- 二者択一のワナ／○一人乗りの救命ボートに、二人が乗り込んだ……／○第三のアイデアを

コラム① 超ディベートについて 037

第2章

なんで勉強しなきゃいけないの？

041

1 どうして答えが出ないのか？ 043

○「納得解」を見つけよう／○ニヒリズムというどん詰まり／○「神は死んだ」

2 「答え」を出すにはこう考える 054

○ニヒリズムを乗り越える／○「問いの立て方」を変える
○自分にとっての正解を／○条件を整える

3 〈自由〉になる——だれにも共通する「答え」 069

○「生きたいように生きる」には／○〈自由〉になるため
○この章のまとめ

コラム②「唯一絶対の正解」ってほんとにないの？ 078

第3章

なんで学校に行かなきゃいけないの？

1 なんで勉強を強制されるの？ 091

○二つの「正論」／やっぱり勉強なんて役に立たない？
○学力Ⅱとどのつまりは「学ぶ力」／○探究型の学び／○「学び」のこれから

第4章

いじめはなくせるの？

2 学校に行くのは何のため？ 107

- どうすれば〈自由〉になれる？／○〈自由〉をめぐる戦争の歴史
- 戦争がなくならない理由／○〈自由の相互承認〉の原理／○感度をはぐくむ

3 学校に必要なこと 125

- がんばってきた日本の学校／○日本の教育は悪平等？
- 何が必要な「平等」か？／○いじめ、体罰、そして教育の未来……

コラム③ 道徳教育のジレンマ 136

1 いじめはどうして起こるのか？ 147

- いじめの根源／○厳罰主義か、更生主義か
- 自己不十全感／○逃げ場のない教室空間

2 いじめのなくし方 161

- 人間関係の流動性／○承認と信頼

○教師の多様性／○教師への信頼／○なぜ体罰はダメなのか？

コラム④「コミュニケーション力」は一つじゃない 181

第5章 これから学校はどうなるの？

○変わりゆく学校／○学校に代わるもの？
○教育の未来のために

ブックガイド・参考文献 202

あとがき 206